

# 東京日々新聞

七百五十四號



西京四谷高倉辺に住む老嫗あり。身は襤褸と纏ひて。垢面へ賣品の炭團を似たる故とて炭團婆々と稱せし。自ら一荷の炭團を擔ひ日々洛中

と呼ばるその郷音と  
形像の嘆辞おじやと  
失笑に。祇園の歌妓  
が橋交際へ阿嬢は何ぞ  
可笑や。吾が斯く真黒ふ  
成て呼あり。阿嬢は真白ふ粧たそく  
歌る舞も俱に皆同じ渡世業ぞかし。  
阿嬢は吾と笑へども吾は又其方衆が鄙  
と渡世を笑ふもよし。

吾も二人の女子ありて  
容顔も此婆々を似す。  
年紀も又阿嬢  
等と似たり。が  
鄙賤な業と  
為たれど堅  
以商家へ奉公  
こそ晝夜録々炭團  
の錢僅る羨餘  
の諺中と衣服  
の些料を送るも  
とて咎むるあらば  
餘り道理と

賤い心と起せぬ為あり。斯く  
罵いらく阿嬢等が無禮ある  
取違へ耻と知らぬ痛し。轉々堂主人編  
鄙さ心と正し良家の細君も

炭團くと呼  
まぐら三條の方  
へ去りて  
さかしの  
更と去格で  
傍に下せし  
荷と拾げ

野良足屋  
元田彫長